



ジャーナリスト

稲葉 康生

1955年に始まった春闘に「限界」が見えて久しい。高度経済成長の波に乗り毎年の春闘で確実に賃上げを

実現してきたが、バブル経済がはじけて以降、状況が一変した。高度成長から低成長、インフレからデフレ経済へと時代が変わる中で、春闘方式が前提と

得、その勢いを中小に波及させていくという仕掛けだった。しかし、賃上げをリードしてきた金属産業の業績が不振に陥り、労組が足並みを揃えて交渉し、集

高度成長期には、労組は前年の物価上昇率に生活上分を加えてベア要求額を決めてきたが、デフレ下では物価が上昇しなくなったため、労組は賃上げの

格差が開き、非正規労働者への対応が後手に回ったことで労働運動の社会的な影響力は低下の一途をたどり、組織率も下がり続けた。

非正規労働者の増加や若者の組合離れにより労働運動は長い冬の時代に入り、経済界からは「春闘終えん」論まで飛び出した。

知恵を絞り「春闘再構築」を

した右肩上がりの成長が崩れてしまったのだ。

中回答を引き出すという土台が総崩れとなった。この結果、低賃金

要求根拠を失ってしまった。その結果、「ベアゼロ要求」を余儀なくされ、労働運動の社

会的な影響力は低下の一途をたどった。大企業と中小企業との賃金

格差が開き、非正規労働者への対応が後手に回ったことで労働運動の社会的な影響力は低下の一途をたどり、組織率も下がり続けた。

春闘とは労組の中央組織が賃上げ方針を示し、大手組合が先陣を切って大幅賃上げを獲

悪循環に陥った。

下、設備投資の減少、低成長への転落という

すでに春闘の機能不全が起きている。大手労組主導からの脱却、

大手と中小企業、そして正規と非正規労働者の賃金格差は正などが今後、春闘の大きな課題となる。非正規の処遇改善を企業に働きかけ、働く人が安心して暮らすための基盤づくりをすることが、労働運動の大きなテーマだ。

1955年に始まった春闘に「限界」が見えて久しい。高度経済成長の波に乗り毎年の春闘で確実に賃上げを

悪循環に陥った。

大企業と中小企業との賃金

格差が開き、非正規労働者への対応が後手に回ったことで労働運動の社会的な影響力は低下の一途をたどり、組織率も下がり続けた。

非正規労働者の増加や若者の組合離れにより労働運動は長い冬の時代に入り、経済界からは「春闘終えん」論まで飛び出した。